

「父と子」

ヨハネの福音書 5:17~30

1. 安息日

ベテスダという池にまつわる偽りの言い伝えに 38 年もの間縛られていた人に向かって、イエシュアは「床を取り上げて歩きなさい」と言って解放しました。しかしその日が安息日であったため、ユダヤ人たちは「床を取り上げる」という行為に対して、そしてそれを命じられたイエシュアに対して激しい迫害を開始しました。

5:17 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」

床を運び出すことは労働の行為と見なされる。安息日とは、「休む」ことにあるから働いてはならない、安息日に働くことは律法違反であり、罪であるというのがユダヤ人たちの考え、教えでした。なぜならモーセが神様から授かった律法、その中心である十戒にこう記されているからです。

出エジプト

20:8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

20:9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。

20:10 しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も——

20:11 それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

この「休む」はヘブル語でヌーアハ(נוח)で、たしかに休むという意味もあるのですが、聖書で最初にこの言葉が使われた時の意味としてはこうでした。

創世記

2:15 神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

このように、ヌーアハには「置く、据える」という意味もあるのです。ですからこのように解釈することができます。神様は六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に「それらを置くべき場所に置かれた、配置された」ということです。たとえ素晴らしい性能をもった機械でも、設置する場所を間違えればその機能を十分に活かすことはできません。たとえば最新型のテレビや冷蔵庫を造っても、それが販売され、消費者の手に渡らなければその性能を活かすことはできません。人材についても言えます。医者や教師が八百屋や魚屋で働いていてその能力を発揮することができるのでしょうか。サッカー選手が野球チームに入ってどんな活躍ができるのでしょうか。「造られたものを置くべき最適な場所に置く」、これはものを造

る以上に重要なことです。神様は七日目にヌーアハ「置く、据える」という、その最も重要な御業をなされたのではないのでしょうか。アダムをエデンの園にヌーアハし、そこを耕させ、守らせました。休ませたのはありません。むしろ仕事を与え、働かせたのです。そもそも神様という御方は、まどろむことも眠ることもない、老いることも疲れることもない、休む必要など全くない御方です。神様が休むという概念は、聖書的とは言えません。

詩篇

121:4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

イザヤ

40:28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。

ですから「神様が休まれたのだから、あなたがたも休まなければならない」、という理屈は成り立ちません。しかしヌーアハを「置く、据える」という意味で捉えるならば、イエシュアが行われた御業に納得がいきます。38年もベテスタという間違った場所にいた病人を移動させ、宮という正しい場所にヌーアハ、置いたのです。それは「安息日にはしなければならないこと」ではなく、「安息日にしなければならないこと」安息日でなければならなかったのです。

そもそも安息日を意味するシャバット(שַׁבָּת)は、歯を象った「噛みしめる、味わう、」ことを意味するシーン(שׁוּ),「神の家、御国」を意味するベート(בַּיִת)、そして「選び、完成」を意味するターヴ(תָּוַם)が組み合わさった言葉で、「御国の完成を味わう」「御国の民として選ばれた喜びを噛みしめる」という意味を持つ言葉です。ですから安息日は「どんな仕事もしてはならない」働いてはならない日でも休まなければならない日でもなく、「集まらなければならない日」です。

申命記

16:8 六日間、種を入れないパンを食べなければならない。七日目は、あなたの神、主へのきよめの集会である。どんな仕事もしてはならない。

この「どんな仕事もしてはならない」という表現は、旧約聖書の中で7回使われていますが、そのどれもが会合、集会すなわち「集まる」ためです。

このように安息日とは、御国の完成を待ち望み、共に集まることを意味していました。そしてその命令を守ること、守らせることに情熱を抱いたユダヤ人たちは、口伝律法という様々な細則を設け、その強制力を高めようとしてきました。しかしいつしかその意味はないがしろにされ、偽りの教えにすり替えられていったのです。

2. 偶像礼拝

5:18 このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。

この当時、ユダヤ人の指導者たちによって安息日は「神の女王」「イスラエルの花嫁」として擬人化され、そしてはや神格化、つまり偶像と化していました。その安息日という名の偶像を打ち砕くためにイエシュアがなされた奇蹟が「ベテスダの池での癒し」だったと考えられます。その安息日を冒瀆されたユダヤ人たちのイエシュアに対する怒りと殺意は、彼らが神様もメシアも求めている、ただ安息日という名の偶像を守ることしか考えていなかったことを表しています。偶像礼拝の本質は、自分に都合の良い神、自分に利益をもたらしてくれる神、すなわち自己中心性、自分勝手、わがままの表れです。つまり自分が神なのです。そんな偶像礼拝の中にあったユダヤ人たちにとって、ご自身を神と等しくするイエシュアの存在は、認めたくない存在、邪魔者、敵以外の何者でもなかったのです。

3. 愛する

5:19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです。

イエシュアは、まことの神とは何かを示すべく、ここからイエシュアの神宣言、「父と子」御父と御子について語り始められます。まず御父は何かをなさそうとしておられる、つまりご計画があることを語られます。そしてそのご計画は、御子との共同作業、連携作業であることを示されます。

5:20 それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。

御子であるイエシュアは、御父である神様の御心以外には行うことができません。その理由は、奴隷が主人を恐れて働くとか、ロボットがプログラムされたこと以外にはできないようなものではなく、「父が子を愛して」いるが故だとイエシュアは主張します。「愛する」はヘブル語でアーハヴ(אהב)です。神様の本質を意味する文字アーレフ(א), 窓を象った象形文字で「見る」ことを意味するヘー(ה), そして家を象った「家族、国」を意味するベート(ב)が組み合わさり、愛するとは「神様が見る国」、つまり神様が計画され、目指しておられる国、神の国、御国を指し示す言葉です。つまり父が子を愛するとは、御父が御子に「神様がイエシュアに御国を与える」ことであると考えられます。

5:21 父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。

国、国家とは本来、場所や建物を指すものではなく、一つの権威、権力によって統治された人の集まり、群れを指すものです。ですから御国を建てるという神様のご計画とは、ご自分の支配のもとに人を集めるご計画とも言えます。今のこの世は神様に支配された世界ではなく、死に支配された世界です。どんな生物も人間もこの支配下にあり、そして死んだものは決して生き返ることができません。それをご自分の支配に移すこと、つまり死の支配から解放し、永遠のいのちを与えることが神様のご計画です。そしてこの永遠のいのちは、受け取る者に選択権があるのではなく、「御子が与えたいと思う者」に与えられるものであり、御子にその選択権、判断基準、つまり裁く権限があることが記されています。

4. 律法

5:22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。

5:23 それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。

ユダヤ人たちの教えは、律法を守らない、敬わない者とは、神を敬わない、冒涇する者だというものでした。それに対してイエシュアは、子を敬わない者は、父を敬わない者であると述べました。つまりイエシュアは、ご自分を神様と等しくしたというよりもむしろ、神様の御言葉である律法とご自分を等しくしたのです。この解釈は非常に重要です。安息日に関する規定も含めた律法全体は、決して悪でも無視されて良いものでもありません。むしろその逆です。律法は、聖書は、まぎれもなく神様が人間に与えられた言葉です。しかしこれは、後の 39 節で語られることなのですが、律法とは、一般的に捉えられている概念である命令と禁止の事項ではなく、イエシュアを指し示すもの、イエシュアについての証言なのです。

ヨハネ

5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。

そしてそのイエシュアを指し示す律法のすべてが、必ず成就することも記されています

マタイ

5:18 まことに、あなたがたに告げます。天地が減びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

成就とは、言葉が目に見える形になること、約束が果たされること、計画が実現することを意味します。イエシュアはまさに目に見えない神が形となって、神様がアブラハムとその子らと交わされた約束、天地創造の前から定めておられたご計画を実現させる、成就させる御方なのです。

5. 信じる

5:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

神様を信じるとは、神様が存在することを信じることではありません。神様がなそうとしておられるご計画を知り、その実現を待ち望むことです。すなわち「神の国とその義とを第一に求める」ことです。「天におられる私たちの父である神様が崇められる御国が、この地に来ますように」と祈ることです。そのような者は、さばきに会うことがなく、死から永遠のいのちに移されるのです。

5:25 まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。

そして、聞く者は生きるのです。

この死人とは、すでに死んでしまった人だけを指すではありません。先ほど述べたように、死の支配下にあるすべての人を指します。今生きている私たちもすべて必ず死ぬことが定められているのです。だからイエシュアは「今がその時」だと言われたのです。そして神の子であるイエシュアの声を聞く者、聞いてそれを受け入れる者、信じてそれを待ち望む者は、永遠に生きると言われました。

6. 言い換え

5:26 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにして下さったからです。

5:27 また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。

この26、27節は、先ほどの21、22節と内容がほとんど同じです。つまり大切なこととして強調するために表現を変えて同じメッセージを繰り返して語っておられるのです。「いのち」と「さばき」、すなわち「救い」か「滅び」かを決定する権限が御父から御子に委ねられているということです。まさに生殺与奪の権です。すべての人に対する生殺与奪の権が、このイエシュアただおひとりに与えられていることを、私たちは絶対にながしろにはなりません。

使徒の働き

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」

5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。

5:29 善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。

この28、29節も、24、25節の繰り返し、言い換え表現だと考えられます。しかしより詳細に神様のご計画が記されています。善人も悪人も「よみがえる」とあります。このよみがえるというヘブル語はアーサー(הָשִׁיר)が使われており、本来の意味としては「造る、作る」です。

創世記

1:26 神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」

ここで人を「造る」と訳されているのがアーサーです。つまりよみがえるとは、もう一度肉体が造られる、与えられることを意味します。善人すなわちイエシュアを信じる者にも、悪人すなわち信じない者にも新しい肉体が与えられます。しかしそれぞれ肉体を持つ意味が異なります。イエシュアを信じる者の肉体は、この地上に建てられる御国に住まい、イエシュアと顔と顔を合わせ、共に生きるための肉体です。一方悪人の肉体は、永遠の滅びである火の池の苦しみを味わうための肉体です。

黙示録

20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。

20:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。

20:13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。

20:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

20:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

7. ベート

5:30 わたしは、自分からは何事も行うことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。

これも 19 節の言い換え表現です。どうもこの 19~30 節には、筆者の「二」という数にこだわった技法が施されているように思えます。まず父と子という二つの存在、そして 21~22 節と 26~27 節、24~25 節と 28~29 節、19 節とこの 30 節が、同じ内容について二度記されていること、「まことに、まことに」という繰り返し、そして善と悪「いのち」と「さばき」という二つの対比。なぜこのような書き方をしたのでしょうか。それはこの箇所が神の国のご計画を指し示す重要なメッセージだったからではないでしょうか。ヘブル文字にはそれぞれ数が宛がわれていて、「二」はベート(ב), 家を象った「家族、国、国民」を意味する神の国、御国を直接的に指し示す文字です。これは二、すなわちベート、御国についてのメッセージであるという意図が暗示されているように思えます。